This CD is a small showcase of African-American music history between mid 19th and early 20th century. And it is a sequel to, and actually, is the origin of my previous CD,
“Dear America,”.

Here are some interesting facts behind the music on the CD.

- Gershwin started his career as a ragtime pianist. He would not exist without Scott Joplin whose father was a slave and mother was a “Free Negro”.
- The famous Cakewalk, “Smoky Mokes” was composed by a white man.
  “Moke” originally meant “useless horse, donkey”, also diverted to “Black people” with a contempt.
- Honky-Tonk pianos were not well maintained or tuned, and it is easy to guess why.
- African descent English composer, Samuel Coleridge-Taylor was called “Mahler of Africa”, and was well admired in black communities in the states.
- The retarded slave-born Pianist, Blind Tom had used several different names, Thomas Bethune, Thomas Greene and Thomas Wiggins. “Greene” was his mother’s last name inherited to him as the slave’s tradition, and his family was sold (as a bargain, because of his blindness) to Gen. Bethune’s family. He changed his last name to his father’s “Wiggins” after freed,
- Blind Tom had been kept in possession of Bethune family even after the civil war, and was finally released by the court order in 1887. He was called, "The last slave set free". While managed by Bethune, he made the profit estimated $750,000 converted to 5 million dollars of today's value, but received $20/month.

In 1887, the year Blind Tom won his freedom, one finest concert grand piano was made at the factory of Steinway and Sons in NY; “The Rosewood” which Maestro Vladimir Horowitz fell in love with. I am honored to present the 122 year-old piano on this CD.
This piano has certainly seen the American history from on the concert stages.

All the music on this CD is very powerful. There is a soul and hope.
In 2009, America has chosen the first African-American President in the history.
People in the states are proudly making new steps with President Obama.

Now, America has a soul and hope.

Eight years have been passed since “Dear America,” was recorded right after 9/11.
I would like to share my thoughts through this letter of music, once again.

Dear America, II

Akira Eguchi

I would like to deeply express my gratitude to the Rare Book, Manuscript, and Special Collections Library of Duke University for providing the valuable materials.

Dear America, II

曲目解説

江口玲

〜〜　はじめに　〜〜

　アメリカの音楽は根っからに明るい。
おおらかで陽気、軽薄だと言われても仕方が無い。
このCDに収録された曲も、文句なしに、とにかく楽しい。

どうしてこんなに明るいのか？

　本当のことを言うと、実はアメリカの作品を主体にした演奏会を開こうと思ったときに、選曲に悩んでしまったのだ。
それまで主にヨーロッパやロシアの芸術作品を演奏してきたのに、アメリカにそれらに匹敵する作品があるのか？
クラシックのピアノリサイタルで演奏する価値のある作品なのか？
はたしてバッハやベートーベンと同列に語れる作品がアメリカに存在するのか？

アメリカのポピュラー音楽を軽視するクラシック演奏家、クラシック愛好家は多い。

僕も以前はその一人だった。

〜〜　疑問　〜〜

　今回のCDは前回の「Dear America,」の続編であり、起源でもある。
近代アメリカのクラシック作品には、何らかの形でジャズの影響が見られるものも多い。
アメリカ人作曲家の作品をさらに演奏したいと思ったとき、やはりジャズを無視するわけにはいかない。
もう少し調べてみよう、それがこのプロジェクトの発端だった。

　ジャズとは何か？漠然と「1900年前後に発生した奴隷たちが持って来たアフリカの音楽と西洋音楽との融合」と聞いたことはあった。
ふと疑問がわく。
　この種の奴隷制はアメリカに限ったことではない。
多くのアフリカ人奴隷が1400年代中期にヨーロッパに連れてこられた。
アメリカにおける奴隷制は、1600年代初頭にヨーロッパよりもたらされた。
そしてヨーロッパにおけるアフリカ人奴隷の解放はアメリカのそれよりは多少早いが、言うなれば、奴隷制はアメリカよりも長期の歴史がある。
西洋音楽の母体であるヨーロッパに、すでにアフリカから連れてこられた奴隷がいたのであれば、
どうしてジャズがヨーロッパから発生しなかったのか？
アフリカ大陸に近いヨーロッパの音楽が、どうしてアフリカ音楽の影響を受けずにクラシックを発展させたのか？
アフリカ音楽とジャズの関係がどのようなものであるのか？

〜〜　エピソード　＜ヨーロッパとアメリカ＞　〜〜

　ヨーロッパでは1800年代までに奴隷解放が数百年のスパンによって度々議論されていた。英語で奴隷を意味する「Slave（スレイヴ）」は、「スラヴ人」から来た単語である。なかには期限付きの契約奴隷も存在した。元来「奴隷」は「アフリカ人奴隷」のみを意味するものでは無かったのである。

　ちなみにヨーロッパにアフリカ人奴隷が持ち込まれた1400年代の音楽では、まだ調性すら確立されていない教会音楽が主流であった。またアメリカにアフリカ人奴隷が持ち込まれた1600年代と言えば、ヨーロッパではフレスコバルディ(Girolamo Frescobaldi, 1583-1643) 、モンテベルディ(Claudio Giovannin Antonio Monteverdi, 1567-1643)と言った作曲家達による初期のバロック音楽が生まれつつある時代である。長調、短調という調性、および和音進行が理論化された和声法が確立されはじめた時代と言えばわかりやすいだろう。そしてヨーロッパでの奴隷制が廃止され始めたころ、音楽史上では古典派からロマン派へ移り変わり始めている。

　当時のアメリカの文化は明らかにヨーロッパに遅れをとっていた。音楽はヨーロッパから輸入されたが、それが発展する余裕が無かったと言うべきか？ヨーロッパでは次々と前衛芸術が発生するのに比べ、アメリカではむしろ大衆音楽として保持される傾向であった。すでに文明の歴史があるヨーロッパと、未開の地を切り開かなければならないアメリカ、その違いは当然のことかもしれない。

　めまぐるしく変化を遂げるヨーロッパの音楽と揺れ動くヨーロッパの奴隷制度、
白人が黒人を支配する絶対服従型奴隷制と二次的なヨーロッパ音楽が主体のアメリカ。
この違いにジャズ発生の鍵があるのではないだろうか？

〜〜　曲目解説　〜〜

1
アメリカ国歌「星条旗」
ジョン・スミス作曲/ウラディミール・ホロヴィッツ編曲
Star-Spangled Banner
By John S. Smith/Arr. by Vladimir Horowitz

画像クリックで拡大

　イギリスの作曲家ジョン・スミス (John Stafford Smith, 1750-1836) のメロディーにフランシス・キー (Francis Scott Key, 1779-1843) が米英戦争 (1812-1815) 中に作った詩を乗せて、後に正式にアメリカ国歌となった。
米英戦争は「第二の独立戦争」とも言われ、キーは1814年バルティモアの戦いの翌朝、英軍の激しい砲撃に荒れ果てたマクヘンリー砦の上に、未だ毅然と揺れる星条旗に感動し、この詩を書いた。(上写真はそのマクヘンリー砦の星条旗、1908~1919頃の撮影、出典　Library of Congress)
　1978年、ロシアからの移民であるピアノの名手、ヴラディミール・ホロヴィッツ (Vladimir Horowitz, 1903-1989) のアメリカデビュー50周年を祝福し、カーター大統領がホワイトハウスでのリサイタルを主催した。
その時に、ホロヴィッツは冒頭でこの曲を演奏して謝意を表した。
　なおこの楽譜は山口雅敏氏の採譜によるものである。

2
マナッサスの戦い
“ブラインド・トム” ベスューン作曲
The Battle of Manassas
By "Blind Tom" Bethune

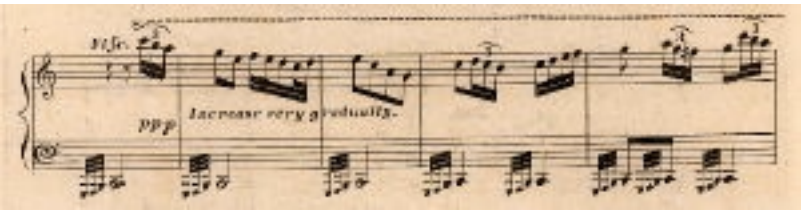
ブラインド（盲目）・トム (Blind Tom, 1849-1908) として知られ、トーマス・ベスューン、トーマス・ウィギンス、またはトーマス・グリーンとも呼ばれる彼の生い立ちについて書いてみよう。

奴隷解放のための南北戦争が始まる13年前、1849年にジョージア州、コロンバスで奴隷である父、ミンゴ・ウィギンス (Mingo Wiggins) と同じく奴隷である母シャリティ・グリーン (Charity Greene) の子供として生まれた。知的障害をもっており、それは医学史においてもめずらしい「サヴァン症候群」"Autistic savant"（ある特定の分野に特異な才能を示す自閉症の一種、日本では画家の山下清がそうだったのでは無いかと言われる）と考えられている。トムはさらに生まれながらの盲目であった。一家はジェームズ・ベスューン将軍 (Gen. James Bethune, 1803-1895) に買い取られたことにより、彼の名字は習慣にしたがい母方の名と新しい主の名字を受け、トーマス・グリーン・ベスューンとなった。前所有者は赤子のトムが将来全く労働力にならないことを知り、一家を安く手放したのである。トムは障害を持っていたが故に、家屋で働く母とともに屋敷の中に入ることを許され、ベスューン家の七人の子供たちからはかわいがられていた。しかしその様子はまるで「犬か猫、ペットをかわいがる」かのようで、「おすわり！立て！」などと教えられていたのである。

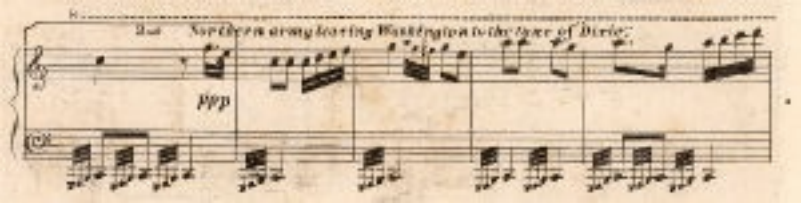
ベスューン家の子供たちはピアノを習っていたが、トムは幼少の頃より音に非常に興味を持ち、あるとき突然ピアノの所に行くと、ベスューン家の子供たちが弾いていた曲を手探りで弾き始めたのである。6歳の頃には即興で演奏するまでになりベスューン将軍は彼に正式にピアノを勉強させることにしたのであった。すぐにプロモーターが付き、各地で演奏することになり、その収益はベスューン家に多額の収入をもたらした。演奏会の口上から察して、多分に見世物的要素もあったであろう。当時のブキャナン大統領 (President, James Buchanan, 1791-1868) や、作家マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) といった著名人たちの前でも演奏したというのであるから、かなりの売れっ子であったには違いない。実際10代の時のリサイタルプログラムには、ショパンやリストの作品も並んでいたのだから、決してたどたどしい演奏をした訳ではないであろう。

南北戦争 (1861-65) の中でも激戦であった「マナッサスの戦い」の模様を聞いたトム少年は非常に興奮し、一気に作曲したらしい。曲には詳細に描写が書き記されている。

まず遠くから小太鼓の音と笛の音と共に、南部の歌 "The Girl I left behind me"「あとに残して来た少女」を奏しながら南軍が行進してくる様子、

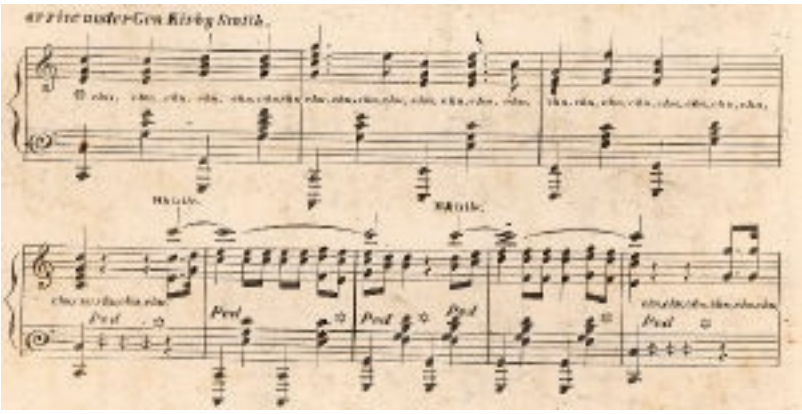


次に北軍がやはり遠くから"Dixie"「ディキシー」のメロディーでやってくるところから始まる。



そして戦い前夜の野営の静けさ、時折武具がふれあう音が聞こえてくる。
突然南軍ボーリガード将軍 (Gen. Pierre G.T. Beauregard, 1818-1893) のラッパが吹き鳴らされ、それに北軍マクダウェル将軍(Gen. Irvin McDowell, 1818-1885)のラッパが答えると、戦いが始まる。

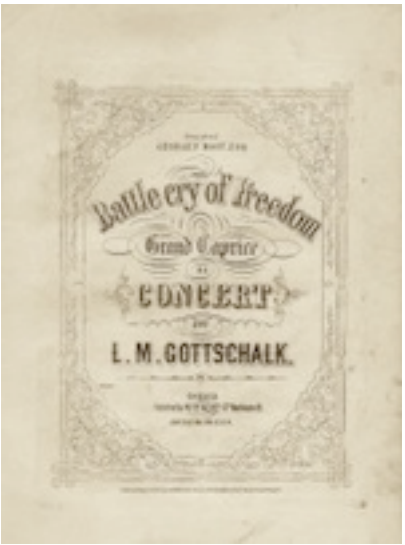
鳴り響く大砲、戦いを鼓舞する軍歌、当時南軍の歌として歌われていた"The Marseillaise"「マルセイエーズ」（現フランス国歌）、そしてアメリカ国歌。
やがて汽車の音と汽笛が聞こえ、南軍のカービー・スミス将軍 (Gen. Kirby Smith, 1824-1893) の軍隊が応援に現れ、戦いはますます激しさを増して曲は終わる。口で汽車の走る音 (Chu, Chu,) を発し、笛を吹く、という指示がある。



南軍を応援し、この曲を演奏することによって南部の聴衆は喜ぶ。熱狂的な聴衆に触れることがこの少年にとっては最高の喜びだった。

自分自身が南部における「自由の無い奴隷」であることも理解できず、この戦いが奴隷解放のためであることも知らず、、、、、、、、

3
「自由への叫び」による演奏会用大奇想曲
ジョージ・ルーツ/ルイス・ゴットシャルク作曲
Battle Cry of Freedom, Grand Caprice de Concert
By George F. Root/Louis M. Gottschalk



「Battle Cry of Freedom（自由への叫び、又はスローガン）」は南北戦争中の1862年、ジョージ・ルーツ (George F. Root, 1825-1895) が北軍のために作曲したものであるが、あまりに有名になったため、言葉を変えて南軍でも歌われることになった。

旗のもとに集まろう、自由へのスローガンを叫びながら。
丘から、平地から、集まろう。
北軍よ、永遠に！
進め、少年達よ！
反逆者を下し、星を掲げよ！
貧しいかもしれない。しかしなにびとたりとも、
奴隷であってはならないのだ！（歌詞抜粋）

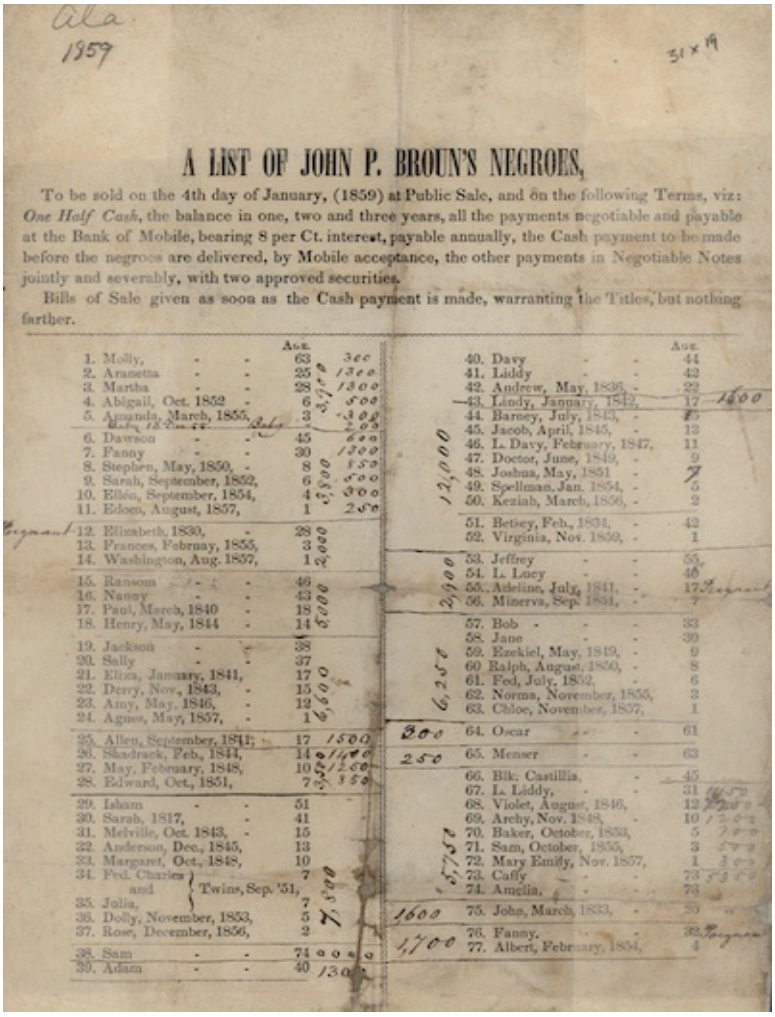
ルイス・ゴットシャルク (Louis M. Gottschalk, 1829-1869) はヨーロッパで音楽の教育を受け、作曲家、超絶技巧のピアニストとして世界に名を馳せた。南部のニューオーリンズの出身ではあるが、南北戦争中は北軍の支持者でもあった。

～～　エピソード　＜奴隷について＞　～～

　奴隷制の時代、アフリカではどのようにして人々が捕らえられたのか？
　一般的には白人による「現地人狩り」によって捕らえられたと言われているが、むしろ正確にはアフリカの部族間での争いによって捕らえられた捕虜たちが、取引されたというべきであろう。
　アフリカ大陸で捕らえられた人々は、奴隷船に乗せられてアメリカ大陸へ運搬された。身動きできないように手足を鎖で繋がれたまま、まるでオーブンの中板のように何段もの板の上に並べられていた。命を落とすものも多数。生き残った生命力の強いものだけが奴隷として高額にて買われて行ったのだ。

　奴隷は暴力に寄って従順を強いられ、主人にとっての労働力でしかなかった。
奴隷達は閉ざされた、自由の無い世界の中で、独自の文化と言語を何世代にも渡って継承していくこととなった。
アフリカでの名前は英語の名前に置き換わり、言語は英語の中に強いアクセントとして呑み残され、アフリカの生活習慣はやがて消え去り、元来の宗教は形を変えてキリスト教に取り込まれていった。教育を受けることは許されず、有色人種は生まれつき白人より劣っているとの認識は、白人達によって一般に植え付けられていった。

1859年1月の奴隷オークションのリスト。
若い男女は高額で取引され、老いたものには値段がついていないのが生々しい。
一家まとめて、あるいは引き離されて買われていった。



A LIST OF JOHN P. BROUN'S NEGROES,

To be sold on the 4th day of January, (1859) at Public Sale, and on the following Terms, viz: *One Half Cash*, the balance in one, two and three years, all the payments negotiable and payable at the Bank of Mobile, bearing 8 per Ct. interest, payable annually, the Cash payment to be made before the negroes are delivered, by Mobile acceptance, the other payments in Negotiable Notes jointly and severably, with two approved securities.

Bills of Sale given as soon as the Cash payment is made, warranting the Titles, but nothing farther.

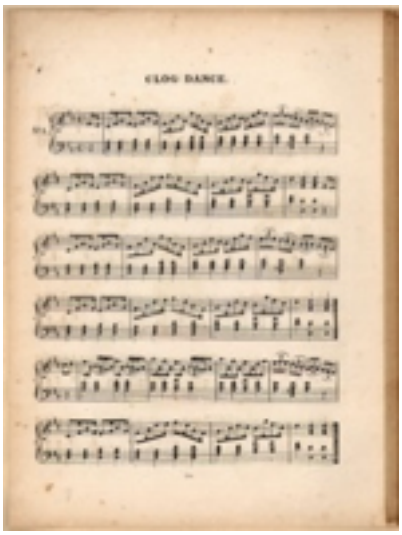
	Age.
1. Molly,	63
2. Arnetta	25
3. Martha	28
4. Abigail, Oct. 1852	6
5. Amanda, March, 1855,	3
6. Dawson	45
7. Fanny	30
8. Stephen, May, 1850,	8
9. Sarah, September, 1852,	6
10. Ellen, September, 1854,	4
11. Edom, August, 1857,	1
12. Elizabeth, 1830,	28
13. Frances, February, 1855,	3
14. Washington, Aug. 1857,	1
15. Ransom	46
16. Nancy	43
17. Paul, March, 1840	18
18. Henry, May, 1844	14
19. Jackson	38
20. Sally	37
21. Eliza, January, 1841,	17
22. Derry, Nov. 1843,	15
23. Amy, May, 1846,	12
24. Agnes, May, 1857,	1
25. Allen, September, 1841;	17
26. Shadrack, Feb., 1844,	14
27. May, February, 1848,	10
28. Edward, Oct., 1851,	7
29. Isham	51
30. Sarah, 1817,	41
31. Melville, Oct. 1843,	15
32. Anderson, Dec., 1845,	13
33. Margaret, Oct., 1848,	10
34. Fed. Charles and Twins, Sep. '51,	7
35. Julia,	7
36. Dolly, November, 1853,	5
37. Rose, December, 1856,	2
38. Sam	74
39. Adam	40
40. Davy	44
41. Liddy	42
42. Andrew, May, 1836,	22
43. Lindy, January, 1842,	17
44. Barney, July, 1843,	15
45. Jacob, April, 1845,	13
46. L. Davy, February, 1847,	11
47. Doctor, June, 1849,	9
48. Joshua, May, 1851	7
49. Spellman, Jan. 1854,	5
50. Keziah, March, 1856,	2
51. Betsey, Feb., 1834,	42
52. Virginia, Nov. 1859,	1
53. Jeffrey	55
54. L. Lucy	46
55. Adeline, July, 1841,	17
56. Minerva, Sep. 1851,	7
57. Bob	33
58. Jane	30
59. Ezekiel, May, 1849,	9
60 Ralph, August, 1850,	8
61. Fed, July, 1852,	6
62. Norma, November, 1855,	3
63. Chloe, November, 1857,	1
64. Oscar	61
65. Menser	63
66. Blk. Castillis,	45
67. L. Liddy,	31
68. Violet, August, 1846,	12
69. Archy, Nov. 1848,	10
70. Baker, October, 1853,	5
71. Sam, October, 1855,	3
72. Mary Emily, Nov. 1857,	1
73. Caffy	73
74. Amelia,	73
75. John, March, 1833,	29
76. Fanny,	32
77. Albert, February, 1854,	4

〜〜　エピソード　＜ラグタイムの歴史＞　〜〜

デューク・ユニバーシティの図書館には1850年代から1920年代までにアメリカで出版された、約1000曲ほどの楽譜のコレクションがある。それらに目を通して行くと非常に興味深い。

南北戦争を挟んで1850年台から80年代までの器楽曲の主流はワルツ、ポルカ、マーチであった。裕福層ではポルカ、ワルツによる舞踏会が催され、マーチは軍隊のみならず、街の祭りのパレードにも必要なものだったのだ。スーザの「星条旗よ、永遠なれ」もこの当時の作品である。

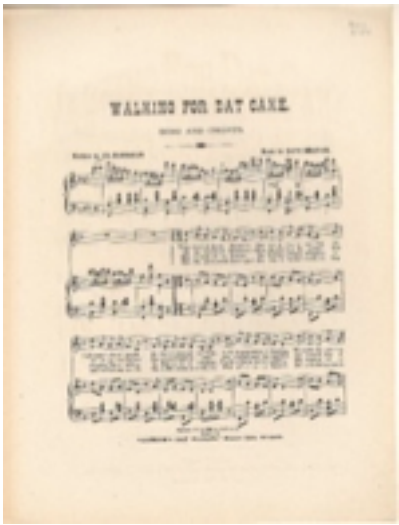
流行のダンス音楽を見て行くと、奴隷解放以降、次第に彼らの音楽が一般に広まって行く様子がわかる。1860年に出版された「フレッド・ウィルソンのクロッグダンス (Fred Wilson's Clog Dances)」の表紙には、黒人の男が描かれているが、和声は非常に単純であり、付点のついた分散和音リズムのメロディーも、ヨーロッパのクロッグダンス（木靴のダンス）とそれほど大きな差異はなく、奴隷特有のものとは考えにくい。



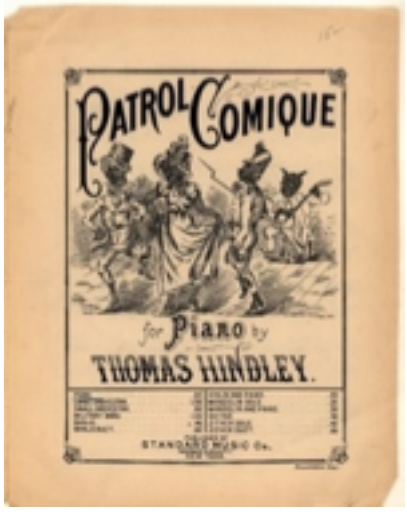
ケークウォークはもともと奴隷達の娯楽として、一番上手に躍ったものにケーキが振る舞われたことから、そのような名前がつけられた。♪♩♩♪ ♩♪♩ のリズムが特徴である。

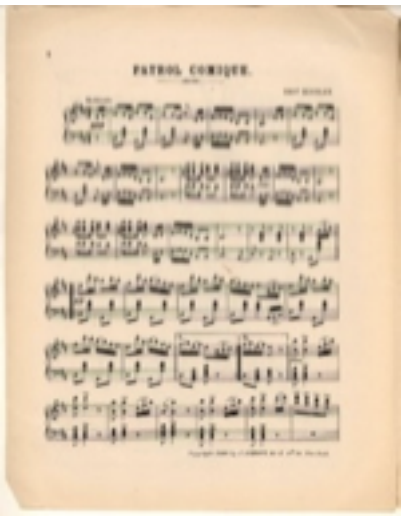
アフリカのガーナ地域の音楽の特徴を持つとも言われているが、その関係を否定する研究家もおり、ケークウォークのリズムの紀元についてははっきりしない。

1877年に出版されたデイヴィッド・ブラハム (David Braham, 1838-1905) の「あのケーキのために躍るんだ (Walking For Dat Cake) 」はケークウォークを題材にした音楽であるが、ポルカ、行進曲の特徴はあるものの、ケークウォーク独特のリズムの特徴は全く見られない。

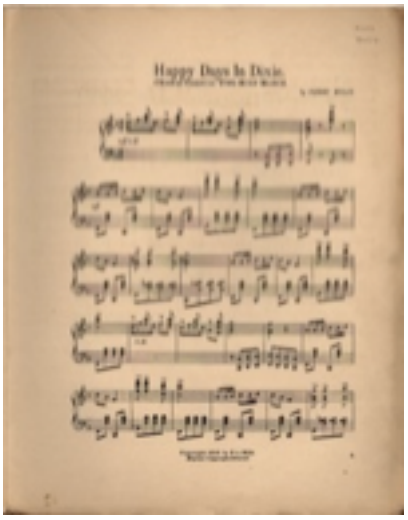


トーマス・ヒンドリー (Thomas Hindley, 生年月日不詳) の「パトロール・コミック(Patrol Comique)」は1886年に出版されたが、その頃にようやくそのリズムの特徴が見られるようになる。

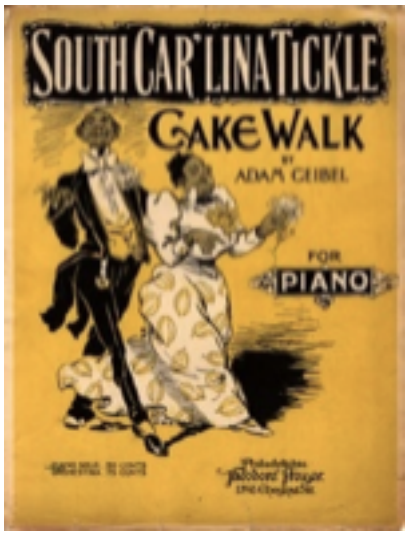




1896年に出版されたケリー・ミルズ (Kerry Mills, 1869-1948) の「デキシーでの幸せな日々 (Happy Days in Dexie)」では、ケークウォークの特徴と同時に楽譜に記されているのは「二拍子の行進曲のように (Characteristic Two-Step March)」とあり、ラグタイムの原型がダンスであると同時に行進曲でもあることがわかる。



ケークウォークが次第に一般社会に広まったのはこの頃からである。多くの楽譜が出版されるようになり、奴隷時代の音楽が奴隷解放後30年経って、ようやく表に出始めたのである。出版されたケークウォークの作曲家に白人が多いということも、また興味深い事実である。当時の楽譜の表紙を見るとケークウォークが躍られる様子がわかる。



上左より、（1897年出版）ジョン・フリン (John H. Flynn, 生年月日不詳) 作曲
「ジョンソンがケーキをもらったぞ (Johnson Wins The Cake)」

（1898年出版）アダム・ゲイベル (Adam Geibel, 生年月日不詳) 作曲
「サウスキャロライナのわくわく！(South Car'lina Tickle)」

（1899年出版）E.T.ポール (E.T. Paull, 1858-1924) 作曲
「ディキシーでのウォーミングアップ (A Warmin'Up in Dixie.)」

（1900年出版）ジョン・ホール (John T. Hall, 生年月日不詳) 作曲
「おばかな黒んぼたち (Looney Coons)」
次項の「Smoky Mokes」と共に、日本語訳にするのをためらったものの一つ。

〜〜　エピソード　＜ホンキートンクピアノ＞　〜〜

今回の録音では次の数曲のラグタイムをホンキートンク (Honky-Tonk) ピアノで録音した。わざと調律を狂わせたピアノである。ホンキートンクとは1890年代以降に見られるようになったアメリカ南部のバーのスタイルの名称で、労働者が集まるバーにピアノが置いてあり、ダンスを楽しみ、同時に娼婦がたむろする場所でもあった。またラグタイムに象徴されるような、リズム感あふれる演奏スタイルの呼称でもある（白人に対する蔑称としてのhonkyは1960年代以降のもの）。

当時のピアノメーカー「ウィリアム・トンク社 (William Tonk & Bros.) 」が、大型の縦型ピアノを制作しており、ホンキートンクの語源になったとも言われている。そのような場所に置いてあったピアノが、今で言うホンキートンクピアノのような音であったかはわからないが、少なくとも最高級のピアノメーカーである「スタインウェイ社 (Steinway & Sons) 」のコンサートグランドような品質のものではなかったであろう。

ラグタイムがホンキートンクピアノで演奏される事について異論を唱えるむきもあるが、やはり雰囲気的には合うように私は感じる。ホンキートンクバーで演奏されるラグタイムの演奏スタイルもしかり、クラシックのように弾いてしまってはいけない。悲しきかな、私はクラシックのピアニストなので、無意識のうちにクラシックの演奏法になってしまう。

「音の粒をそろえる」「和音を弾くときには一番上の音を少し強く弾く」などなど。
そこから外れることがこれほど難しいこととは思わなかった。

「音をもっと狂わせてください」「鍵盤の高さと重さをもっとばらばらにしてください」等々、調律師の高木氏に通常の録音の時とは正反対の注文を次から次へとお願いすることになった。

4
スモーキー・モークス
エイブ・ホルツマン作曲
Smoky Mokes
By Abe Holzmann

　作曲者のエイブ・ホルツマン (Abe Holzmann, 1874-1939) はニューヨーク生まれのドイツ系移民の二世であり、音楽の教育はドイツにて受けた。
このスモーキー・モークスは1899年に出版された。
この楽譜には、「行進曲のテンポで」とは書かれておらず、「ケークウォークで二拍子 (Cake Walk and Two Step) 」と記されている。

　韻を踏んだふざけたタイトル、そして軽快で、非常に楽しい曲である。
しかしそのタイトルの意味するところが何なのか、考えてみたい。
　「Smoky～煙が出るような（エキサイティングな）、Mokes～黒んぼ」がおそらく作曲者の意味したところの題であろう。
ところが、Smokyとは煙ですすけた、という意味から、ぼんやりした、また、煙ですすけて黒くなった、という意味合いで、黒人を示す蔑称でもある。
Mokeという単語はロバ、或は駄馬を意味すると同時に、役に立たない家畜という意味で、やはり黒人を示す蔑称としても使われたのである。
　さらに表紙の左部分には次のように書かれている。
"Published also as a song with humorous darky text"「滑稽なダーキーの歌詞がついた歌も出版」。
ダーキーとは、現在では使われることの許されない「色の黒い奴」という黒人への蔑称である。
ちなみに1800年代から1900年代初期に出版され、このように黒人の蔑称を使用したタイトルが付けられた曲は、数多く存在することも知っておいてほしい。

5
メイプルリーフ・ラグ
Maple Leaf Rag

6
ザ・エンターテイナー
The Entertainer
スコット・ジョプリン作曲
By Scott Joplin

　奴隷解放以前、ごく少数ではあるが、自由な身分の黒人が存在していた。主人からその働きの褒美として自由を与えられたり、主人の死後に解放されたり、あるいは自分自身を買い取るということもあった。自由黒人の中には白人のように農場を経営して奴隷を所有するものもいた。

　ラグタイムの王様と呼ばれるスコット・ジョプリン (Scott Joplin, 1868?-1917) は、元奴隷の父と自由黒人(Free negro)の家庭で育った母との間に生まれた。
ドイツ系の移民の音楽教師よりピアノの手ほどきを受け、ミズーリ州セダリアにある黒人のためのジョージ・スミス大学 (George R. Smith College for Negros) にて学んだ。
　ラグタイムには様々な形態がある。原型は先にも述べた通り、行進曲やポルカであり、「ウン・パ、ウン・パ（oompah oompah）」と擬態される低音リズムに基づく。
ほとんどのラグは二拍子で書かれているが、ワルツの形態のものもあり、軽快なケークウォーク、ゆったりとしたスロー・ドラッグ (Slow Drag) もある。早すぎないテンポで、と指定されることが多いが、ゆったり目に「スウィング (Swing) 」させて弾くこともあるし、生き生きと速く演奏されることもある。その時の気分や状況で変化すべきなのであろう。

「メイプルリーフ・ラグ」はジョプリンの名を世間に広めた出世作であった。

7
ラグタイム・ナイチンゲール
ジョゼフ・ラム作曲
Ragtime Nightingale
By Joseph Lamb

三大ラグタイムライターとはスコット・ジョプリン、ジェイムズ・スコット (James Scott, 1885-1938)、そしてジョゼフ・ラム (Joseph Lamb, 1887-1960) を指す。
三人の中ではただ一人の白人であるラムは、没年が1960年ということで、彼自身が演奏した録音も残っており、当時のラグタイムのスタイルを知るには非常に興味深い。ジョプリンより20年若いということもあり、形態も和声もよりいっそう進化したラグタイムが聞ける。
彼自身がこの曲について語っている肉声の録音がある。その中で、「同じくピアニストである姉が購読していた音楽雑誌に掲載されていたショパンの作品の一部からヒントを得た」と言っており、おそらくそれは「革命のエチュードOp.10-12」であろう。

〜〜　想　〜〜

　ホンキートンクピアノでの演奏をどう思われたであろうか？
私にとってはとにかく楽しい。
しかし、、、、

　どうして調律が狂ったアップライトピアノなのか？
これが本当に彼らが弾きたかったピアノなのだろうか？
良い音の、ちゃんと調律のされたピアノで弾いたみたいとは思わなかっただろうか？

　「いや、俺たちにゃこういうピアノがちょうどいいんだよ。これで充分だ。楽しけりゃそれでいいんだよ。」
そんな自嘲を込めた声が聞こえたような気がした。

〜〜　追記　〜〜

　さて、ここで一つ是非とも書いておかねばならないことがある。ベスューン将軍もエイブ・ホルツマンも、その他の白人作曲家たちも決して極悪人であった訳ではない。
　自分たちがオークションに出されることを知った赤ん坊トムの母親は、ばらばらに買われて行けば命を絶たれる運命にある息子を救うために、街で見かけた名士ベスューン将軍に、自分たち一家を買い取ってもらうよう懇願したのだ。その時代が当たり前の習慣として奴隷を所有し、黒人を差別し、それが普通のことであったのだ。
　ホルツマンに至っても、そのタイトルの付け方についてとやかく言われるのは全くの濡れ衣かもしれない。むしろ私の見方が穿ったものなのだろう。
　しかしアメリカで生活していて、時折感じることがある。ニューヨークは人種のるつぼと言われるが、その通り多種多様の人種、国籍、宗教を持つ人々であふれている。アメリカでは公には人種差別、宗教差別は存在しない。しかしながら、、、、、、

　ディズニーのアニメ、「ライオンキング」は子供たちに大人気である。お子さんのいるご家庭ではご覧になったかたも多いのではないか？でも、皆さんは気付いただろうか？その中で良いライオンは色が白く、悪いライオンは黒く描かれている。こそこそと悪さをして群がるハイエナたちはスペイン語訛りの英語を話す。これをアフリカ系、ヒスパニック系の人たちはどう感じるか、作者は考えたことがあるのだろうか？

無垢な子供たちに暗黙のうちに植え付けられる、

かすかな、

何か。

差別されたことのない人は全く気付かないもの、

差別される者にしか感じられない小さな棘、

それは今でも確かに存在している。

〜〜　エピソード　＜黒人霊歌　Negro Spirituals＞　〜〜

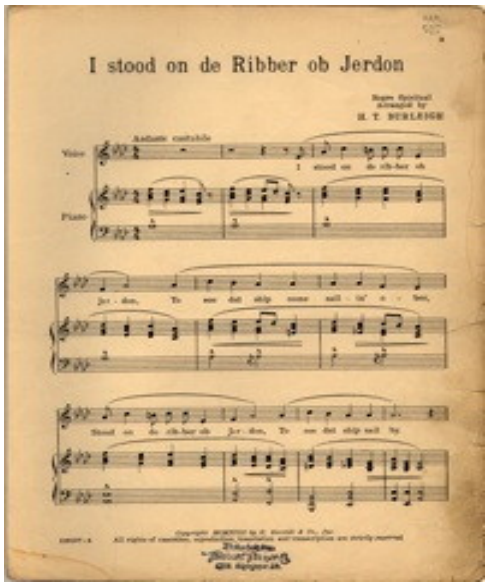
スティーヴン・フォスター(Stephen C. Foster, 1826-1864)が作曲した多数の「ミンストレル(Minstrel)」、(白人が顔を黒く塗って、黒人を演じる喜劇のための音楽) は、奴隷達によって歌われていたメロディーを参考にしたものも多いと言われている。しかし行動範囲の限られた奴隷達のメロディーが、広範囲にわたって同様に歌われていたとは考えにくい。それぞれの街、農場ごとに存在するメロディーや、あるいは歌詞に何らかの共通点はあったであろうから、フォスターの旋律は非常に貴重な記録でもある。もしかしたらフォスターの旋律に黒人霊歌の原型があるのではないかとも思ったが、残念ながら確認はできない。

ところで黒人霊歌の歴史は意外と短く、1830年代になってから発生したとされる。奴隷たちの信仰はアフリカ言語の消失（使用の禁止）とともに、アフリカ土着の宗教からキリスト教へとシフトしていくが、ブッシュ・ミーティング(Bush Meeting)と言われる奴隷達の屋外宗教的集まりの場で、彼ら独自の歌を歌ったところがメロディーの起源ともされる。やがて「教え」が白人主体の解釈であり、その矛盾に気付くことにもなり、「神からの啓示を受けた奴隷、ナット・ターナー(Nat Turner, 1800-1831)の反乱」の後に、次第に聖書の物語に二重の意味を含ませた歌詞による歌が歌われるようになった。

しかしながら口承されるメロディーは定着せず、その精神(Spirits)のみを保持しながら常に変化しつつ広まって行った。黒人霊歌は1865年以降、解放された奴隷達から次第に遠ざかって行く。
過去の忌まわしい記憶を忘れるためであり、また、自由を手に入れた黒人達にとって既に必要のないものになったのだ。やがて、これらの美しくも悲しいメロディーは集められ、楽譜に保存されることになったが、厳密な意味で本来の黒人霊歌は消滅したと考えられている。

クラシック音楽では音階の第三音が長調、短調を決定するのだが、ブルー・ノート(Blue Note)と言われるジャズ特有の音階では、この第三音が長調と短調との中間音程が使われ、またクラシックで導音と呼ばれる第七音はやや低めに使われる。これらの特徴は黒人霊歌にも見られるというが、記譜が不可能なため、楽譜からそれを確かめることはできない。

しかしヘンリー・バーリー (Henry Thacker Burleigh, 1866-1949、黒人のバリトン歌手、作曲家)編集の「ヨルダンの河のほとりに立っていた (I stood on de Ribber ob Jerdon)」には、その片鱗が垣間見られる。メロディーに上下に揺れ動く第三音が記されている。この楽譜が出版されたのが1918年であることを考えると、これが歌の原型かどうか判断ができないが、黒人霊歌の中には他にも第三音を中間音で取ることができそうなメロディーはいくつも存在するので、これらがおそらくブルース、そしてジャズの発生に影響を与えたのであろう。



8
サムタイムズ・アイ・フィール・ライク・ア・マザーレスチャイルド
サミュエル・コルリッジ＝テイラー作曲
Sometimes I Feel Like a Motherless Child
By Samuel Coleridge-Taylor

サミュエル・コルリッジ＝テイラー (Samuel Coleridge-Taylor, 1875-1912) はイギリスのクリオール（アフリカ系と白人との混血）である父と白人の母との間に生まれた。何度かおとずれたアメリカで、黒人たちからは非常に尊敬される存在であり、白人の音楽家たちからは「アフリカのマーラー」と呼ばれた。次の二曲は黒人霊歌を題材にした「24の黒人のメロディー(24 Negro Melodies, Op59)」からの抜粋である。

時々、母のいない子供になったような気がする
故郷から遠く、遠く、離れてしまって
時々、俺はもう長くはないんだろうと思う
天国に昇って行くんだ

主人の意のまま買われ、売られていく奴隷たち。自分たちにとって「自由」とは全く手の届かないもの。奴隷として生まれ、奴隷として死んでゆく、短くて、長い一生。この命が終われば行き先は天国。そう信じて毎日を生きていたのだ。しかしここにもかすかな希望が見られる。解放されるのは　"Heaven"「天国」へ、とは言わず、"Heavenly Land"「天国」または「天国のような地（自由の地）」だと言う。ちなみに1850年頃の奴隷の平均寿命は約32歳であったと言われている。幼少の死亡率を考慮してもあまりに短い命である。

9
ディープ・リバー
サミュエル・コルリッジ＝テイラー作曲
Deep River
By Samuel Coleridge-Taylor

深い河、俺のふるさとはヨルダン河の向こう側だ
深い河、神様！俺は川向こうの集会所に行きたいよ
ああ、行ってみたいと思うだろ？福音に満ちた礼拝に
あの安らぎに満ちた希望の地に！
ああ、深い河、神様、俺はこの河を越えて行きたい

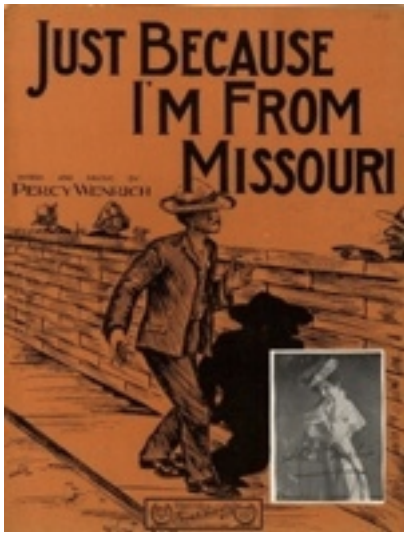
黒人霊歌の中でももっとも有名で美しいものの一つである。深い河とはヨルダン河のことであり、エジプトに奴隷として連れて行かれたイスラエルの民は、その河の向こうの聖地、カナンに想いを馳せた。やがて彼らはモーゼに導かれて念願のカナンにたどり着く。

ノースキャロライナ州には実際にディープ・リバーという名の河がある。その河を渡った向こう岸に、奴隷解放運動にたずさわるキリスト教の一派であるクウェイカー教徒の屋外礼拝所があった。ミシシッピー河もまたディープ・リバーと呼ばれる。この河の向こう側は北軍の地であった。

南部の奴隷達にとって、決して越えることのできない、深い河。この河さえ越えることができれば、自由が手に入る！

〜〜　エピソード　＜解放とその後＞　〜〜

一度は黒人達から疎まれた黒人霊歌であるが、1900年代になると再び歌われ始めた。自由を喜び、過去から脱出したはずであったが、すぐに現実を知ることになる。解放から何年、何十年、あるいは今現在に至っても、延々と続く「負の連鎖」である。また、自由であっても差別は残った。教育を受けることが許されなかった時代に育った元奴隷達がつける職業は限られており、生活に追われる彼らの子どもたちもまた、教育よりも労働を選ばざるを得ない。一度は自由の地に働き先を探しに出た黒人達は、成功した者もしなかった者も、やがて南部に戻ってくることも多かった.労働者として農場に戻ったものも少なくはなかった。南部の出身というだけで、北部の人間からその奴隷訛りをばかにされることも多かったのだ。そして、ミュージシャンになることもまた、彼らの選択肢の一つであった。



左上より（1874年出版）C.A. ホワイト(C.A. White, 1832-1892) 作曲。「ディキシーに戻るところだ。(I'se gwine back to Dixie)」南部黒人訛りのこの歌は1900年代初頭までさかんに歌われていた。「ディキシーに帰るんだ。もうさまようことも無い。昔の農場が懐かしい。あそこに戻ることは二度と無いと思っていた。けど時がこの老いぼれの頭を変えたんだ。心はディキシーにある。」
(1878年出版)　J.T. ラトリッジ(John T. Rutledge, 生年月日不詳)作曲。前曲と共に表紙に注目。非常に精密で凝ったものである。「アラバマに死にに帰るんだよ。(I'm going back to Alabam' to die.)」「あちらこちらをさまよったけれど、やっぱり自分の家はアラバマだ。綿の花が懐かしい、農場が懐かしい。ダーキーどもは俺が帰ってくるって知ってるんだろうか？」

(1903年出版) パーシー・ウェンリック (Percy Wenrich, 1887-1952) 作曲
「ミズーリの出身だというだけで (Just because I'm from Missouri)」同じ黒人からも南部出身はからかわれた。次の曲とともにブルーノートの原型らしき姿がみられる。
(1902年出版)ウィル・マリオン・クック (Will Marion Cook, 1869-1944, ドヴォルザークに師事した黒人作曲家) 作曲の「ダホメにて (In Dahomey)」。人気の黒人のミュージシャン達は楽譜の表紙にも登場した。1920年以前の黒人エンターテイナーとして絶大なる人気を誇った、バート・ウィリアムズ (Bert Williams, 1875-1922) とジョージ・ウォーカー (George Walker, 1873-1911)。
　初期のブロードウェイで大ヒットしたミュージカルで、Dahomeyはアフリカにあったダホメ王国の事である。奴隷輸出国として繁栄したが、1900年に消滅、現在のベナン共和国。

10
リアルトのさざなみ
Realto Ripples

11 ~ 17
7 つの前奏曲
Seven Preludes

11, 前奏曲第一番、
Prelude No.1,

12, 前奏曲(メロディー第17番)、
Prelude (Melody No.17),

13, 前奏曲(ルバート)、
Prelude (Rubato),

14, 前奏曲第二番(ブルー・ララバイ)、
Prelude No.2 (Blue Lullaby),

15, 前奏曲(4度のノヴェレッテ)、
Prelude (Novelette in Fourths),

16, 前奏曲第三番(スペイン風前奏曲)、
Prelude No.3 (Spanish Prelude),

17, 前奏曲 (断片)、
Prelude (Fragment)、

以上、ジョージ・ガーシュウィン作曲
By George Gershwin

18
アイ・ガット・リズム
ジョージ・ガーシュウィン／江口玲編曲
I Got Rhythm
George Gershwin/Arr. by Akira Eguchi

ユダヤ系ロシア人移民の両親の元に生まれたジョージ・ガーシュウィン(1898-1937)は10歳の時に友人のバイオリンリサイタルを聴いて音楽に目覚め、ピアノのレッスンを受け始めた。高校を中退した15歳のガーシュウィンはNYのティン・パン・アリー(Tin Pan Alley)で当時全盛期だったラグタイムの奏者として働き始めた。当時の演奏はピアノロールにも多数残されている。この「リアルトのさざなみ」は19歳の時に出版され、彼の名を一躍有名にした出世作である。二十代後半の頃、本格的に作曲を勉強しようとパリに行ったが、師匠のナディア・ブーランジェー (Nadia Boulanger, 1887-1979) は、彼がクラシックの書法を学ぶことが良いことかどうか、心配もしていたようである。やがてこの心配は実際のものとなり、ガーシュウィンをしばらくの間スランプに陥らせる原因ともなる。

モーリス・ラヴェルは彼の才能を非常に高く評価していた。ラヴェル、ドビュッシーらの印象派の書法はガーシュウィンにも大きな影響を与え、同時にフランスの作曲家たちにもジャズのイディオムは大きな影響を与えた。エリック・サティやドビュッシーがケークウォークを取り入れ、ラヴェルはブルースを彼のバイオリンソナタに使い、同時にクラシックのピアニズムを継承したガーシュウィンの書法は、多くのクラシックピアニストたちをも魅了していった。

なおここに録音されているアイ・ゴット・リズムの楽譜は、全音楽譜出版社の「G. ガーシュウィン ピアノ作品集」江口玲編曲、の中に含まれている。

〜〜　エピソード　＜ブラインド・トム　その後＞　〜〜

南北戦争終了により解放されたはずのトムは、障害者に必要な保護をすると言う名目で、相変わらずベスューン家によって管理されていた。トムを管理していたジェームズ・ベスューン将軍の息子、ジョン・ベスューンは事故で亡くなったが、彼の遺言によりトムは再びベスューン将軍の元に送りかえされた。しかしジョンの未亡人エリザは、トムが年老いた母親のシャリティと共に暮らせるよう裁判をおこし、1887年、奴隷解放宣言から25年の経過後、ようやくトムは自由の身となった。それまでトムに与えられていたのはピアノのある小さな部屋と食事、わずかな現金のみ、それでもトムは何の疑問も持たず、幸せだったようだ。むしろこの裁判で「弁護士」という人種に対して、かなりの恐怖感をいだいたようである。

かくしてベスューン家がトムの演奏から得た収入は約75万ドル (現在の価値として約5億円) 、しかし彼がニューヨークの母親の元に旅立った時の所有物は、銀のフルート一本と身の回りの衣服のみであった。その後は「解放された最後の奴隷」と呼ばれ、父親の名前を使ってトーマス・グリーン＝ウィギンスとして演奏活動を続け、1908年に心臓発作で亡くなった。

ベスューン将軍とブラインド・トム

〜〜　曲目解説　〜〜

19
月明かりの中の水
“ブラインド・トム”　ベスューン作曲
Water in the Moonlight
By "Blind Tom" Bethune

「月明かりの中の水」は非常に穏やかで、安らぎを感じる曲である。私はこのタイトルから色々想像してしまう。目の見えないトムがどうして月明かりを感じることができたのだろう？どうして「月明かり」を題材に曲が書けたのだろうか？

身近な誰かが、静かな月夜に、静かな湖のそばで、月明かりがどんなに美しいものなのか、トムにも理解できるように優しく話してくれたのではないだろうか？

実際に演奏してみると、非常に幅広い音域での音の跳躍があって演奏しにくい。やはり曲芸としての要素は、盲目のピアニストとして生きて行くためには必要なものだったのかもしれない。

〜〜　巡り合わせ　〜〜

　1887年、ニューヨークのスタインウェイ社ですばらしい楽器が作られた。「ローズウッド」と呼ばれるこのピアノは、1891年にカーネギーホールがオープンした際にステージの上に貸し出されていた。数十年に渡りコンサートステージで活躍したそのピアノは、やがて日本に運ばれ東京のホテルに置かれることとなった。1986年に来日したホロヴィッツがそのピアノを非常に気に入って弾き続けたという、まさに銘器である。ホロヴィッツは専属調律師のフランツ・モアに「私がカーネギーホールでデビューした時に弾いたピアノがどうしてここにあるんだ？」と尋ねたと言う。通常の楓の木で作られた黒い楽器ではなく、美しいローズウッドの木目のフルコンサートグランドは、一度見たら忘れられないほどの気品を漂わせている。

　私は今回の録音はどうしてもその楽器で行いたいと思った。
これらの曲が作られ、演奏された時代を、この「ローズウッド」はステージの上からしっかり見て来たのだ。
そして、皆様にはもう一度前ページをご覧頂きたい。
この楽器が作られた1887年とは、最後の奴隷、ブラインド・トムが自由を勝ち得た年でもあるのだ。

　「時の流れ」はそれほど遠い昔の話ではない。
1955年12月、アラバマ州モンゴメリーで一人の黒人女性が逮捕された。ローザ・パークスである。
当時白人と有色人種は学校も別であったし、レストラン、映画館、バス、電車等、公共の何処においても「区別」され、同席することはなかった。それぞれに専用席があり、出入り口がはっきりとわけられていた場所もあった。
　仕事帰りのバスの中で、後方に指定されていた有色人種用の席に座ったローザは、白人専用席が足りなくなったために座席を空けわたすよう、運転手から命令された。それを拒否した彼女は逮捕され、周辺黒人達のバスのボイコット運動に発展した。釈放後、彼女は公民権運動の先駆者の一人として行動した。
　その「区別」がついに破られたのは、人種差別に積極的に立ち上がったジョン・F.　ケネディ大統領が提案した、アメリカにおける全ての人種、男女の権利が同等に保証されるための法律の制定によってであった。有色人種が白人と同等の人間であることがついに認められたのである。
しかしケネディ大統領はその公民権法の成立を見届けることことなく、法案提出の直後1963年に暗殺された。

そして、その1963年に、私は生まれた。

〜〜　あとがき　〜〜

　冒頭で私は「アメリカの音楽は明るい」と言った。
ケークウォーク然り、ラグタイム然り。
この明るさの源が何であるのか？

　どんな状況にあっても、自分の求める救いはどこかに必ずある、という希望。
どんな境遇でも笑いで吹き飛ばそうとする強さ。
しかしその背景にある事実にしっかりと目を向けてみれば、明るさだけではない何かが見えてくる。
その何かが見えたときに、アメリカの音楽にあるただ者ならぬ強さに気付く。
そして、それこそがアメリカと言う国そのものではないか？

　2009年アメリカに史上初のアフリカ系の大統領が誕生した。
リンカーン大統領による奴隷解放宣言から147年、ここまで到達するのにこれほどの年月が必要だったのだ。
アメリカ国民はオバマ大統領のもと、新しい歴史を作ろうとしている。
アメリカ国民が自らの変化のために、その第一歩を踏み出した。
もし2005年に亡くなったローザ・パークスがもう少し長生きしていたら、これをどう思うのだろうか？

　ニューヨークの9/11テロ直後に録音されたCD、"Dear America,"から8年、
私は再びアメリカへの想いを音の手紙に託したいと思っている。

"Dear America, II"

もう一度、

親愛なるアメリカへ、

江口玲　　2009年9月

　本文中に多数の差別用語が出てくる。これらは決して差別的意図で使用しているものではなく、
時代の背景をありのままに伝えるために使用したことをご了承頂きたい。
そして最後に、貴重な楽譜、資料を提供してくださった、
デューク・ユニバーシティ (Duke University) 図書館に多大なる謝意を表す。

THE FLOWERS COLLECTION

The Battle of Manassas

for the

PIANO

BY

BLIND TOM.

Published by S. Brainard's Sons _ Cleveland.

Fife.

ppp

Increase very gradually.

2nd Northern army leaving Washington to the tune of "Dixie."

ppp

Fifes.

Cannon

ff "Yankee Doodle" heard through the noise of battle

Drums.

arrive under Gen Kirby Smith.

✲ chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu,

Whistle.

Whistle.

chu, chu, chu, chu, chu.

Ped ✲

Ped ✲

Ped ✲

Ped ✲

Ped ✲

chu, chu, chu, chu, chu, chu, chu,

To my friend
GEORGE F ROOT. ESQ.

Battle cry of Freedom

Grand Caprice
DE
CONCERT
par
L. M. GOTTSCHALK.

15

Wakelam

CHICAGO
Published by ROOT & CADY 67 Washington St.
New York WM. HALL & SON.

Entered according to Act of Congress A.D. 1863 by Root & Cady in the Clerks Office of the Dist. Court for the North. Dist. of Ill.

Ala.
1859

31 x 19

A LIST OF JOHN P. BROUN'S NEGROES,

To be sold on the 4th day of January, (1859) at Public Sale, and on the following Terms, viz: *One Half Cash*, the balance in one, two and three years, all the payments negotiable and payable at the Bank of Mobile, bearing 8 per Ct. interest, payable annually, the Cash payment to be made before the negroes are delivered, by Mobile acceptance, the other payments in Negotiable Notes jointly and severably, with two approved securities.

Bills of Sale given as soon as the Cash payment is made, warranting the Titles, but nothing farther.

		Age.	
	1. Molly,	63	300
	2. Aranetta	25	1300
	3. Martha	28	1300
	4. Abigail, Oct. 1852	6	500
	5. Amanda, March, 1855,	3	300
	Baby 13 Dec 58. Baby	"	200
	6. Dawson	45	600
	7. Fanny	30	1300
	8. Stephen, May, 1850,	8	850
	9. Sarah, September, 1852,	6	500
	10. Ellen, September, 1854,	4	300
	11. Edom, August, 1857,	1	250
Pregnant	12. Elizabeth, 1830,	28	
	13. Frances, Februay, 1855,	3	
	14. Washington, Aug. 1857,	1	
	15. Ransom	46	
	16. Nanny	43	
	17. Paul, March, 1840	18	
	18. Henry, May, 1844	14	
	19. Jackson	38	
	20. Sally	37	
	21. Eliza, January, 1841,	17	
	22. Derry, Nov., 1843,	15	
	23. Amy, May, 1846,	12	
	24. Agnes, May, 1857,	1	
	25. Allen, September, 1841,	17	1500
	26. Shadrack, Feb., 1844,	14	1400
	27. May, February, 1848,	10	1250
	28. Edward, Oct., 1851,	7	850
	29. Isham	51	
	30. Sarah, 1817,	41	
	31. Melville, Oct. 1843,	15	
	32. Anderson, Dec., 1845,	13	
	33. Margaret, Oct., 1848,	10	
	34. Fed. Charles and Twins, Sep. '51,	7	
	35. Julia,	7	
	36. Dolly, November, 1853,	5	
	37. Rose, December, 1856,	2	
	38. Sam	74	0000
	39. Adam	40	1300

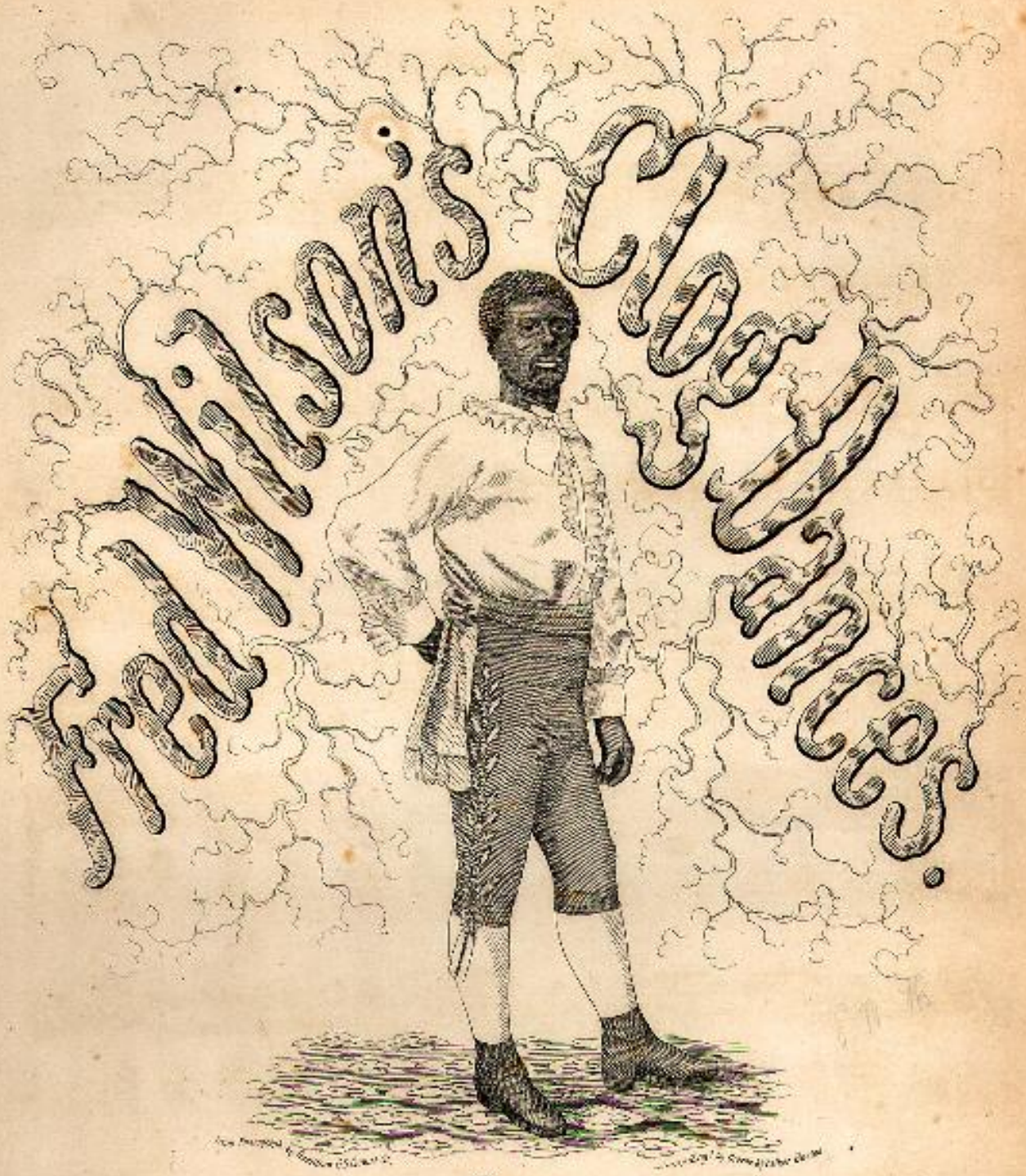
		Age.	
	40. Davy	44	
	41. Liddy	42	
	42. Andrew, May, 1836,	22	
	43. Lindy, January, 1842,	17	1600
	44. Barney, July, 1843,	15	
	45. Jacob, April, 1845,	13	
	46. L. Davy, February, 1847,	11	
	47. Doctor, June, 1849,	9	
	48. Joshua, May, 1851	7	
	49. Spellman, Jan. 1854,	5	
	50. Keziah, March, 1856,	2	
	51. Betsey, Feb., 1834,	42	
	52. Virginia, Nov. 1859,	1	
	53. Jeffrey	55	
	54. L. Lucy	40	
	55. Adeline, July, 1841,	17	Pregnant
	56. Minerva, Sep. 1851,	7	
	57. Bob	33	
	58. Jane	30	
	59. Ezekiel, May, 1849,	9	
	60 Ralph, August, 1850,	8	
	61. Fed, July, 1852,	6	
	62. Norma, November, 1855,	3	
	63. Chloe, November, 1857,	1	
300	64. Oscar	61	
250	65. Menser	63	
	66. Blk. Castillia,	45	
	67. L. Liddy,	31	1450
	68. Violet, August, 1846,	12	1200
	69. Archy, Nov. 1848,	10	1200
	70. Baker, October, 1853,	5	700
	71. Sam, October, 1855,	3	500
	72. Mary Emily, Nov. 1857,	1	300
	73. Caffy	73	5350
	74. Amelia,	73	
1600	75. John, March, 1833,	25	
1,700	76. Fanny.	32	Pregnant
	77. Albert, February, 1854,	4	

321

MUSIC
A-7334

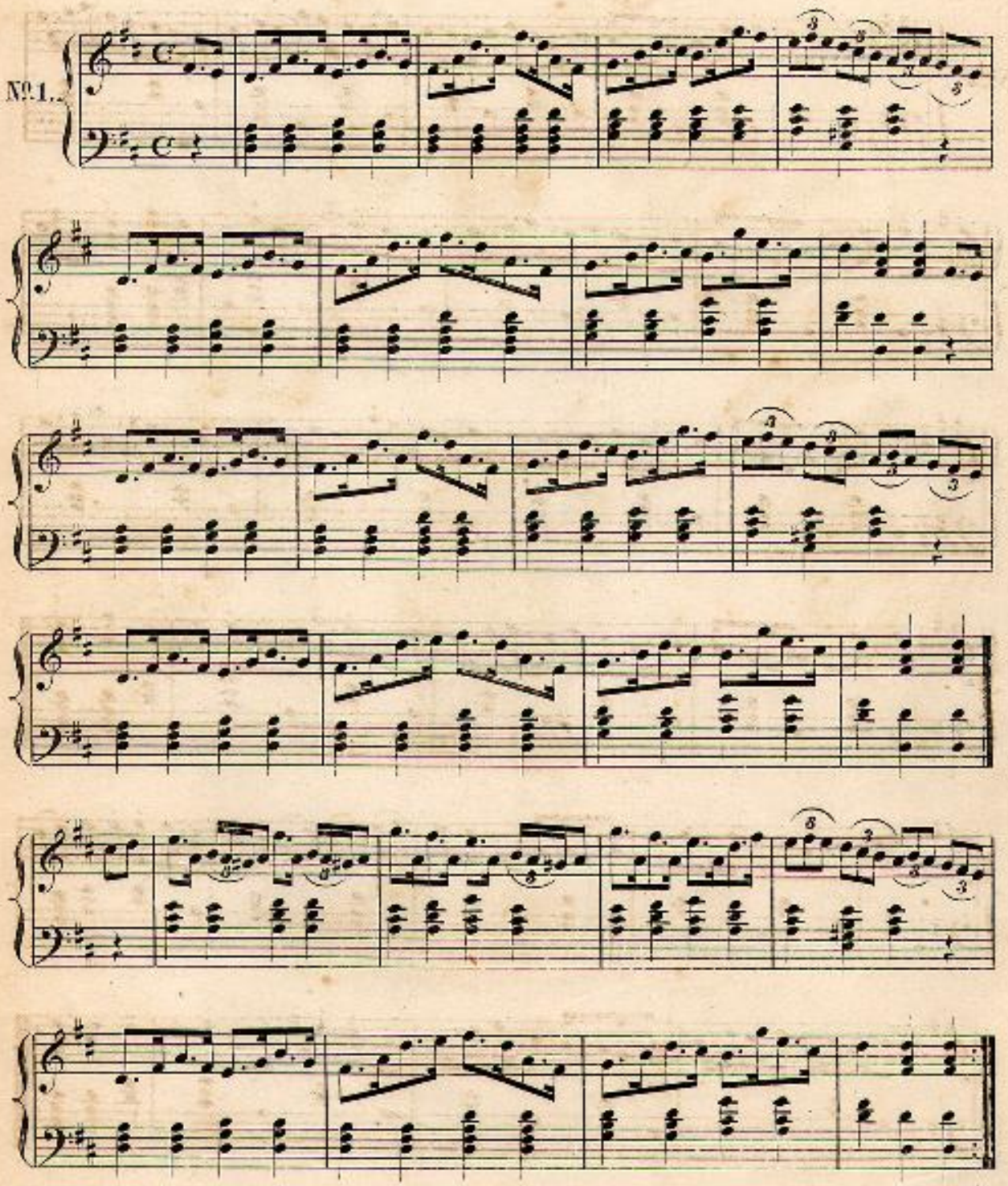
1860

Fred Wilson's Clothing.



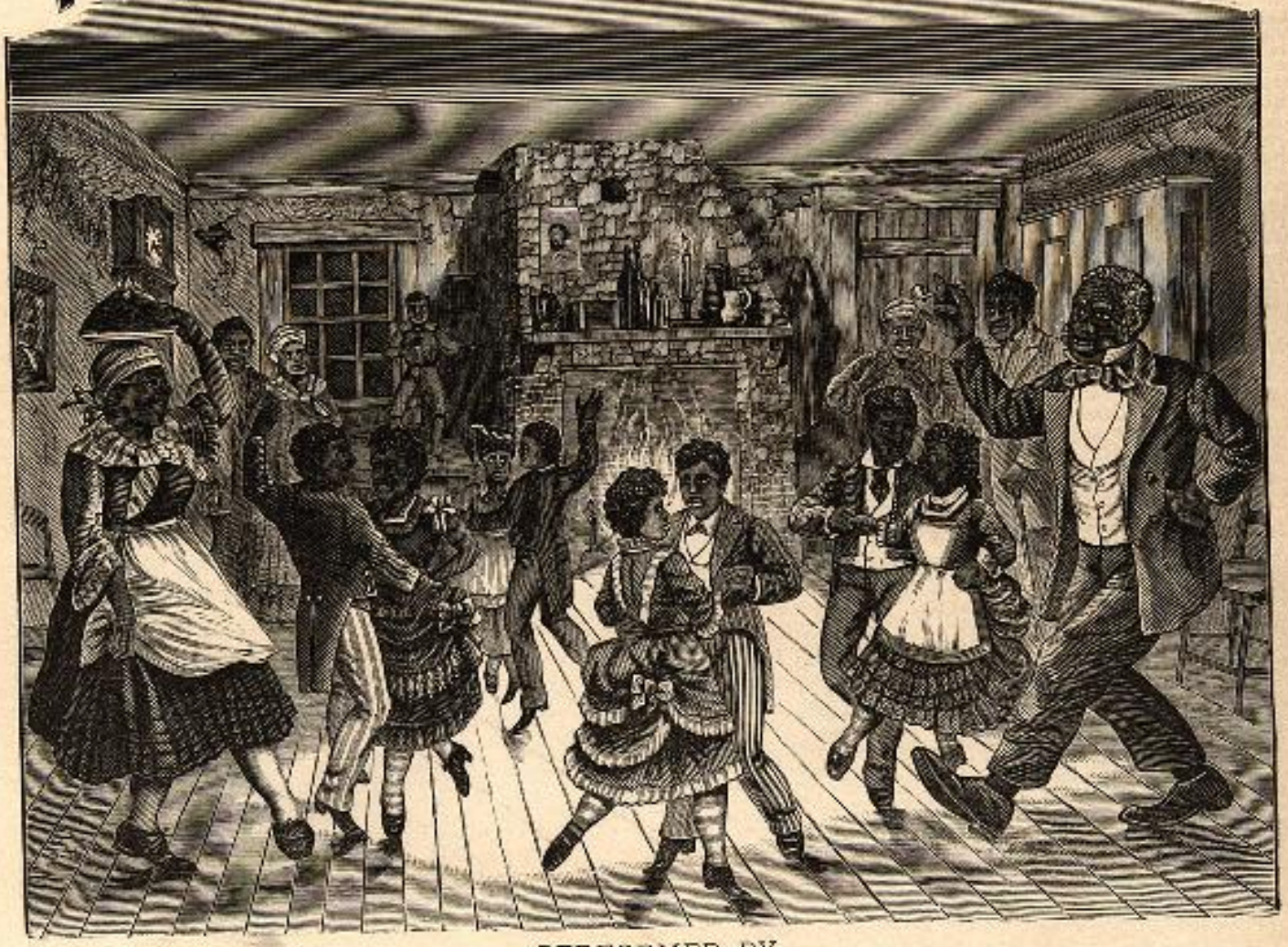
Boston.
Gilmore & Russell, 61 Court St.

CLOG DANCE.



159 1870

WALKING FOR DAT CAKE.



PERFORMED BY

HARRIGAN & HART.

WORDS BY ED. HARRIGAN. 5 MUSIC BY DAVE BRAHAM.

NEW YORK:
Published by WM. A. POND & CO., 25 Union Square, (Broadway, between 15th and 16th Sts.)

COPYRIGHT 1877, BY WM. A. POND & CO.

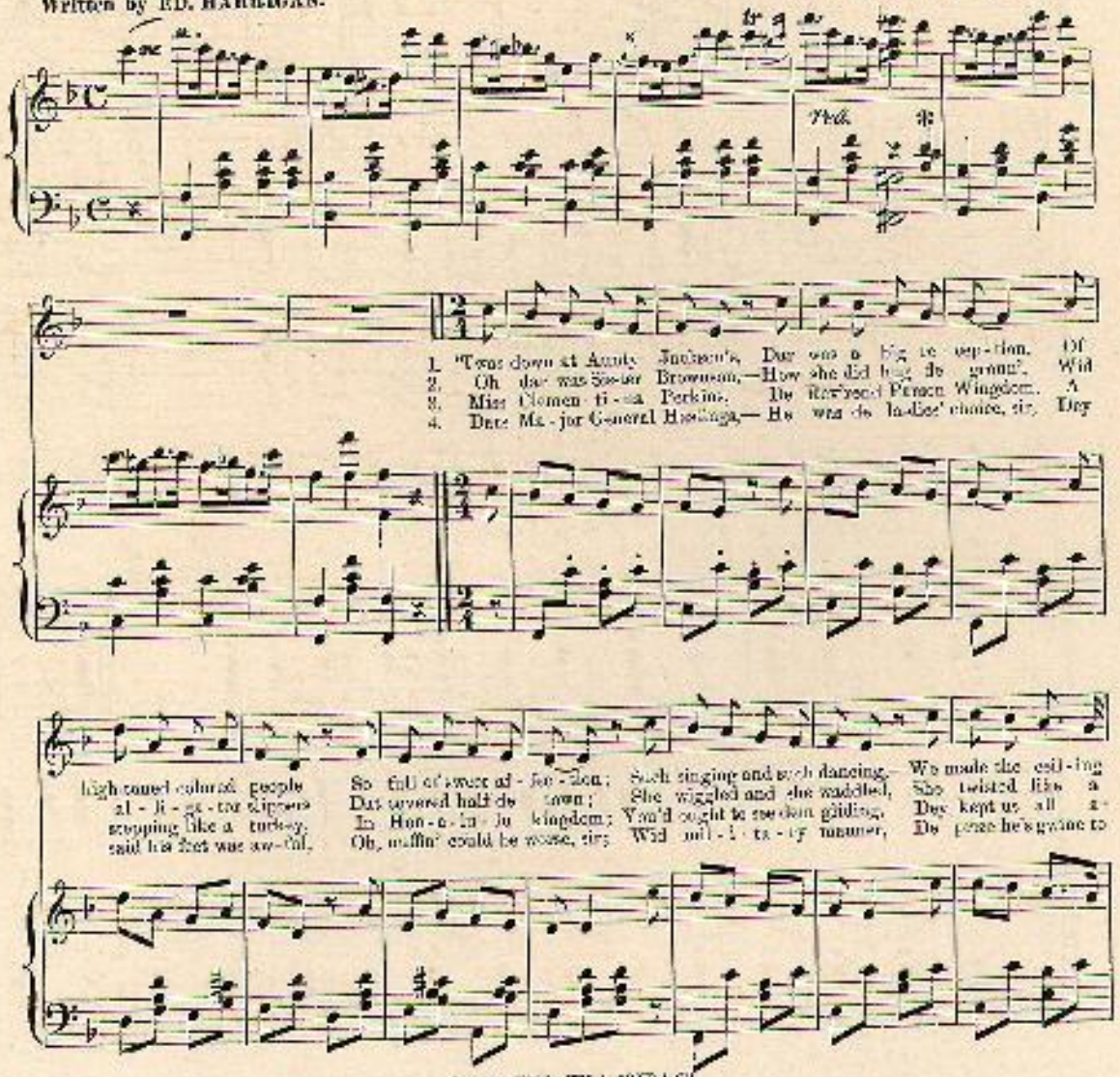
Music
B-156

WALKING FOR DAT CAKE.

SONG AND CHORUS.

Written by ED. HARRIGAN.

Music by DAVE BRAHAM.



Copyright, 1879, by Wm. A. Pond & Co.
5281—6

"PATRICK'S DAY PARADE." Picture Title, 40 cents.

15

PATROL COMIQUE

for Piano by

THOMAS HINDLEY.

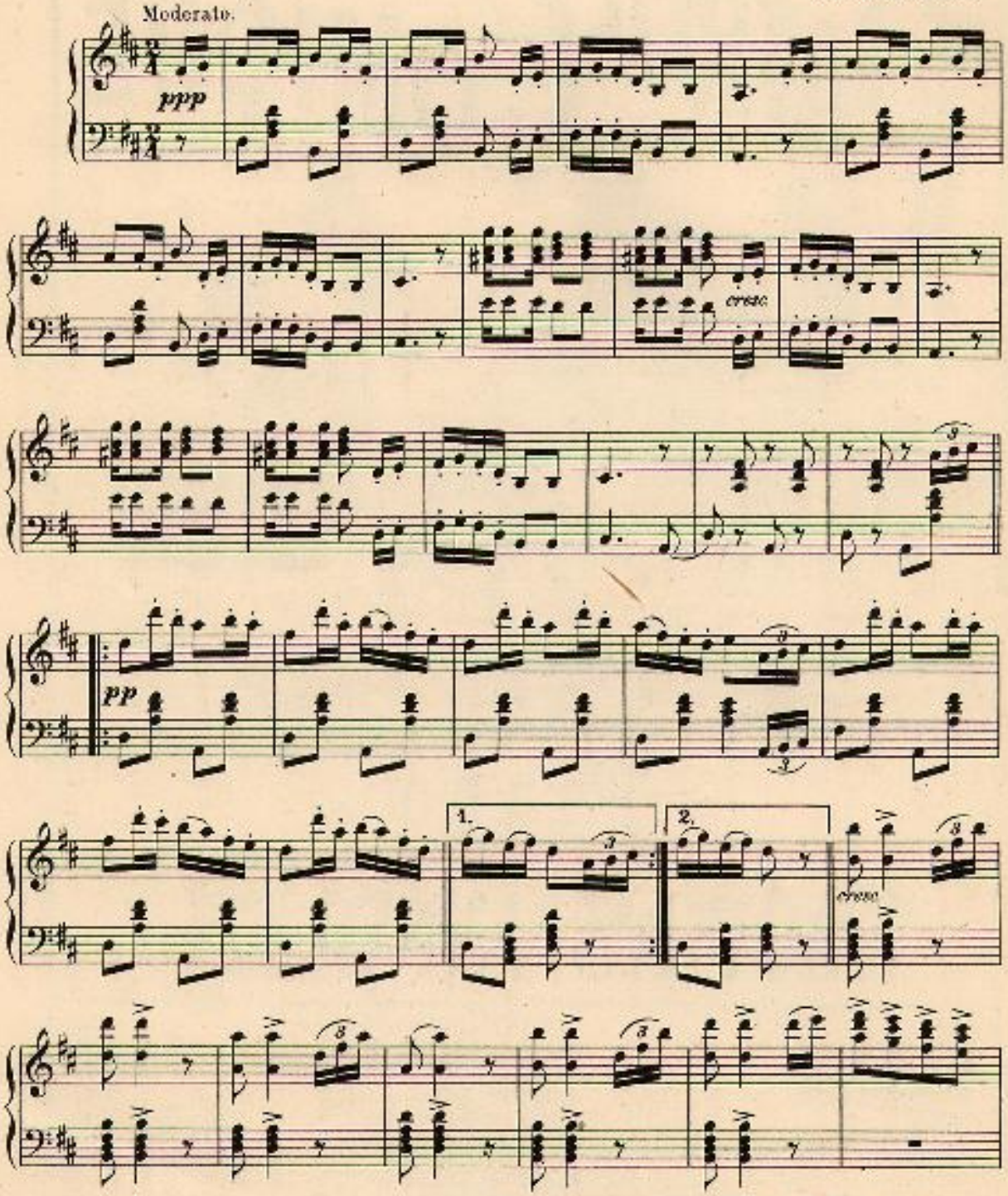
PIANO	.50	VIOLIN AND PIANO	.50
LARGE ORCHESTRA	1.00	MANDOLIN SOLO	.35
SMALL ORCHESTRA	.80	MANDOLIN AND PIANO	.50
MILITARY BAND	1.00	GUITAR	.40
BANJO	.40	ZITHER SOLO	.40
BANJO DUET	.80	ZITHER DUET	.60

PUBLISHED BY
STANDARD MUSIC Co.,
(GRASMUK & SCHOTT.)
NEW YORK.

Zimmermann Engr.

PATROL COMIQUE.

THOS HINDLEY.



Copyright 1886 by J. SCHOTT, 52 E. 4th St. New York.

HAPPY DAYS IN DIXIE

Characteristic Two Step March

BY

KERRY MILLS.

5

Published by
F. A. MILLS,
45 West 29th St., New York.

LONDON: CHAS. SHEARD & CO.

TORONTO, CANADA – Anglo Canadian Music Pub. Assoc. Lt'd.

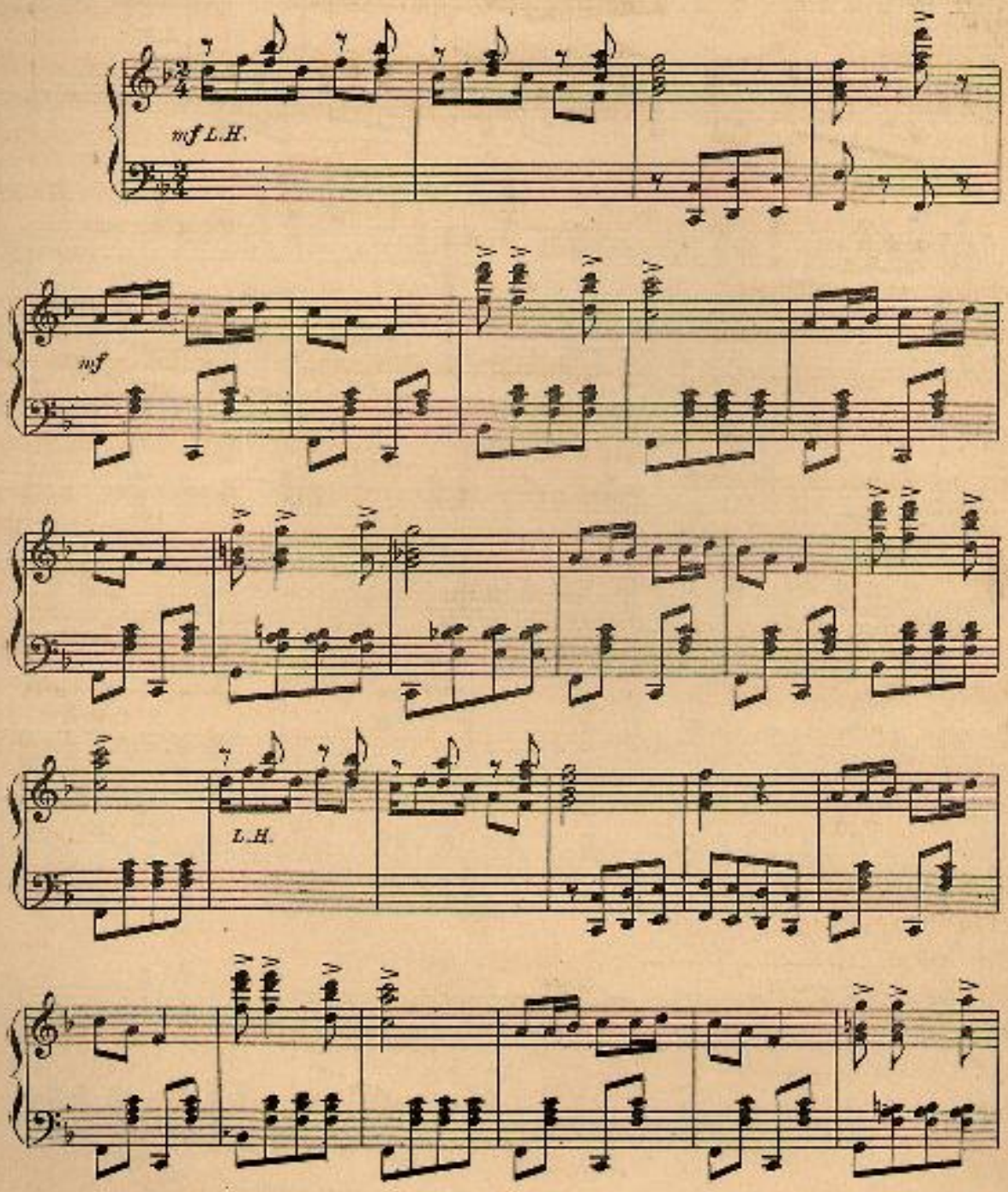
NOT SOLD WITHOUT THE SIGNATURE OF

MUSIC
B-519

Happy Days In Dixie.

CHARACTERISTIC TWO-STEP MARCH.

by KERRY MILLS.



Copyright 1896 by F. A. Mills.
English Copyright Secured.

1897

JOHNSON WINS THE CAKE

Cake Walk Song

Words & Music By
JOHN H. FLYNN.

Published By
HOWLEY HAVILAND CO.
4 East 20th St New York
CHARLES SHEARD & CO. LONDON

5

Geo Hart

SOUTH CAR'LINA TICKLE

CAKE WALK

BY

ADAM GEIBEL

FOR

PIANO

PIANO SOLO...50 CENTS
ORCHESTRA..75 CENTS

Philadelphia.
Theodore Presser.
1708 Chestnut Str.

D Merrill

A WARMIN' UP IN DIXIE.

SONG 5

5

CAKE WALK, MARCH, AND TWO STEP

BY E.T. PAULL, Author of BEN HUR CHARIOT RACE March, AMERICA FOREVER March, &c.

PUBLISHED BY E.T. PAULL MUSIC Co. 44 WEST 29th ST.

NEW YORK

MILWAUKEE WIS ROHLFING SONS MUSIC Co — CHICAGO ILL. NATIONAL MUSIC Co — LONDON, ENG HOWARD & Co — TORONTO, CAN. WHALEY, ROYCE & Co

SPRINGFIELD, MASS A. H. GOETTING — CHICAGO, ILL LYON & HEALY.

Copyright For all Countries

Copyright MDCCCXCIX By E.T. PAULL.

LOONEY COONS

CAKE WALK & TWO STEP

BY

JOHN T. HALL

COMPOSER OF "WEDDING OF THE WINDS," "ADLYN WALTZES," "BATTLE OF THE WAVES," "MATINEE GIRL," ETC.

JOHN T HALL MUSIC PUBLISHING CO.
1285 BROADWAY — NEW YORK, N.Y.

WALTZ

WHALEY, ROYCE & CO. TORONTO, ONT.

CHAS. SHEARD & CO. LONDON, ENG.

5

DEDICATED TO OUR MUTUAL FRIEND:— MR. MONROE H. ROSENFELD.

SMOKY MOKES

PUBLISHED ALSO AS A SONG WITH HUMOROUS DARKY TEXT

PLAYED AT ALL THEATRES AND BY LEADING BANDS AND ORCHESTRAS.

PHOTO BY HALL, N.Y.

COPYRIGHT 1898 BY FEIST & FRANKENTHALER.

PUBLISHED ALSO FOR ALL INSTRUMENTS INCLUDING MANDOLIN, GUITAR, ZITHER, BANJO, ORCHESTRA, BAND, ETC., ETC.

5

CAKEWALK AND TWO-STEP

COMPOSED BY A. HOLZMANN.

NEW YORK
C. H. DITSON & CO.

CHICAGO, ILL.
LYON & HEALY.

TORONTO, CAN.
WHALEY, ROYCE & CO.

PUBLISHED BY
FEIST AND FRANKENTHALER.
1227 BROADWAY,
42 W. 30TH ST. NEW YORK.

LONDON
B. FELDMAN, 9 BERNERS STREET, W.

SAN FRANCISCO, CAL.
SHERMAN, CLAY & CO.

CHICAGO, ILL.
NATIONAL MUSIC CO.

A. H. GOETTING,
SPRINGFIELD, MASS.

To the Maple Leaf Club.

MAPLE LEAF RAG.

By King of Ragtime writers

Scott Joplin.

Composer of

"Swipesy Cake Walk,"

"Sunflower Slow Drag."

(5)

Published by

JOHN STARK & SON

ST. LOUIS, MO.

R.B.R.
music
#956

I stood on de Ribber ob Jerdon

Negro Spiritual
Arranged by
H. T. BURLEIGH

Andante cantabile

Voice

Piano

I stood on de rib-ber ob Jer - don, To see dat ship come sail - in' o - ber,

Stood on de rib-ber ob Jer - don, To see dat ship sail by.

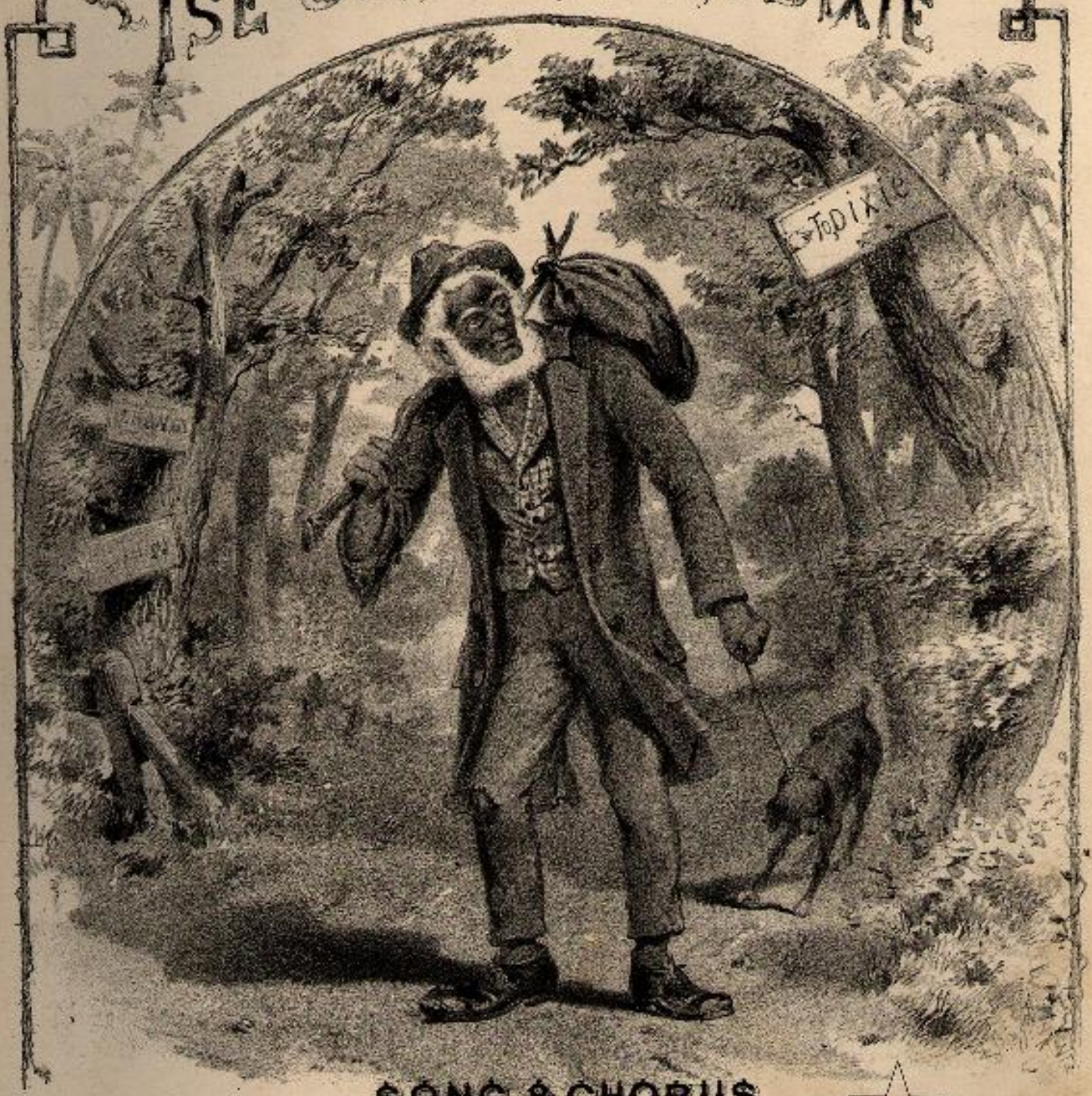
Copyright MCMXVIII by G. Ricordi & Co., Inc.
All rights of execution, reproduction, translation and transcription are strictly reserved

Philadelphia
Theodore Presser Co.
1712 Chestnut St.

TO CHARLIE HOWARD.

1274

I'SE GWINE BACK TO DIXIE



SONG & CHORUS

BY

C. A. WHITE.

AUTHOR OF "THE OLD HOME AINT WHAT IT UST TO BE" &C.

4

BOSTON,

White Smith & Company.

516 Washington Street.

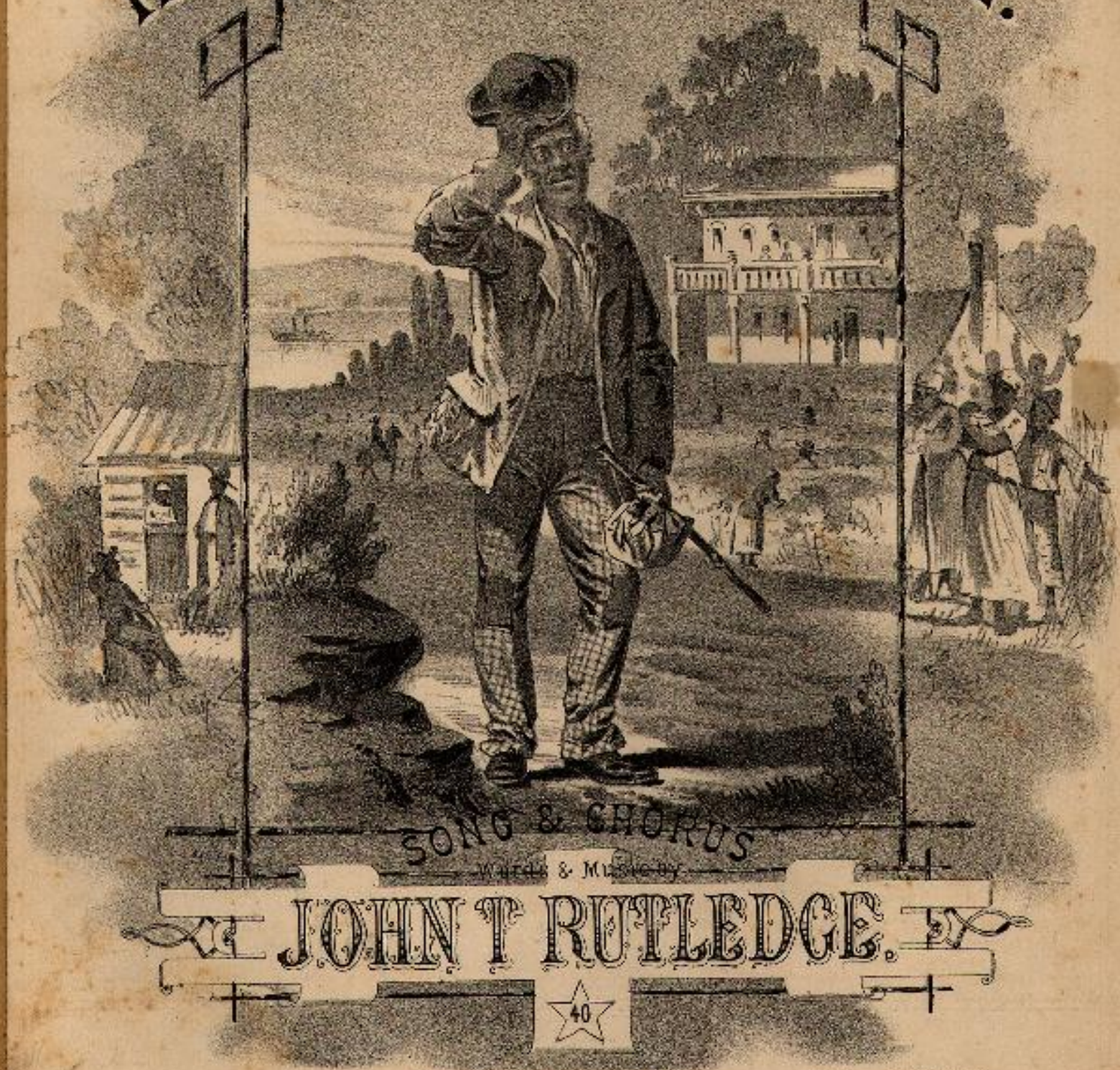
CHICAGO. THE ROOT & SONS MUSIC CO. | NEW YORK. Wm. A. POND & CO. | MONTREAL, P.Q. A. J. BOUCHER. | BANGOR, ME. PATTEN & WHEELDEN. | SAN FRANCISCO. M. GRAY. | SACRAMENTO CITY, CAL. L. K. HAMMER.

Entered according to Act of Congress in the Year 1875 by White, Smith & Co. in the Office of the Librarian of Congress at Washington.

To my Friend
Lizzie N. Hahn, Memphis Tenn

I'M GOING BACK TO ALABAM' TO DIE.

PLANTATION MELODY



SONG & CHORUS

WORDS & MUSIC BY

JOHN T. RUTLEDGE.

40

EAST LIVERPOOL OHIO.

W.J. Morgan & Co. Lith. Cleveland O.

PUBLISHED BY

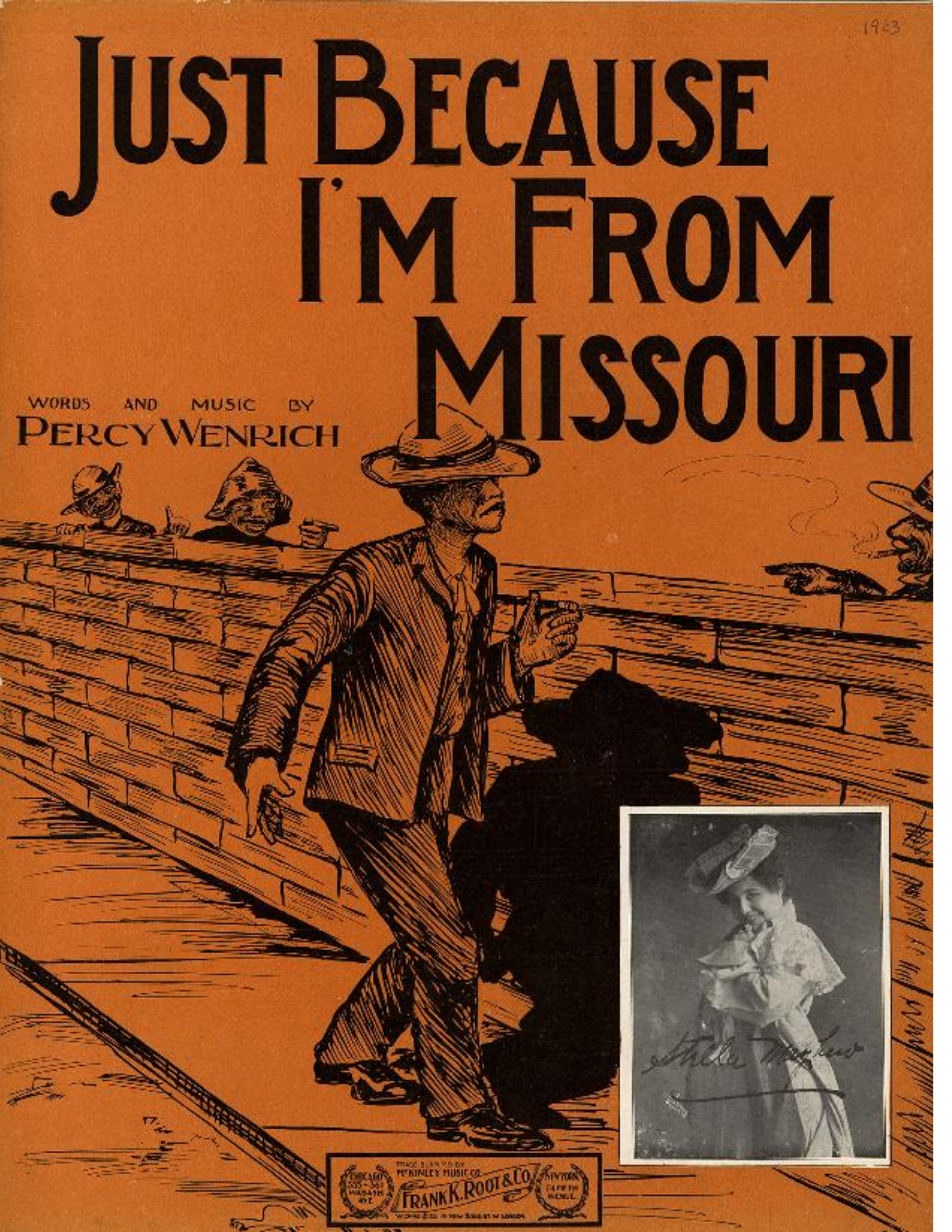
W. L. THOMPSON & CO.

Entered according to Act of Congress in the Year 1878 by W.L. THOMPSON in the Office of the Librarian of Congress at Wash.

1923

JUST BECAUSE I'M FROM MISSOURI

WORDS AND MUSIC BY
PERCY WENRICH



Music
B-781

Just Because I'm From Missouri

Words & Music by PERCY WENRICH

Very slow

Talk a - bout your Jo - nas and your Hoo - doo men,
All the mon - ey that I get is just like brass,

Or the coons who quarrel for love, ____ I'm worse off than an - y cra - zy
E - ven if it once was gold: ____ If my luck don't change then I'll blow

old has - been Down be - low or up a - bove. ____
out the gas If the weath - er ain't too cold. ____

Copyright MCMIII by Buck & Carney
Copyright Transferred July, 1908, to FRANK K. ROOT & CO.

SONG HITS OF IN DAHOMEY

SUNG BY

WILLIAMS & WALKER

WORDS-PAUL LAURENCE DUNBAR | WILL-MUSIC MARION COOK

She's Dancing Sue

For Florida ❧ The Czar

Returned

(Empty and so silent now the old cabin stands)

Evah Darkey is a King

Colored Aristocracy

My Lady Frog

Little Gypsy Maid

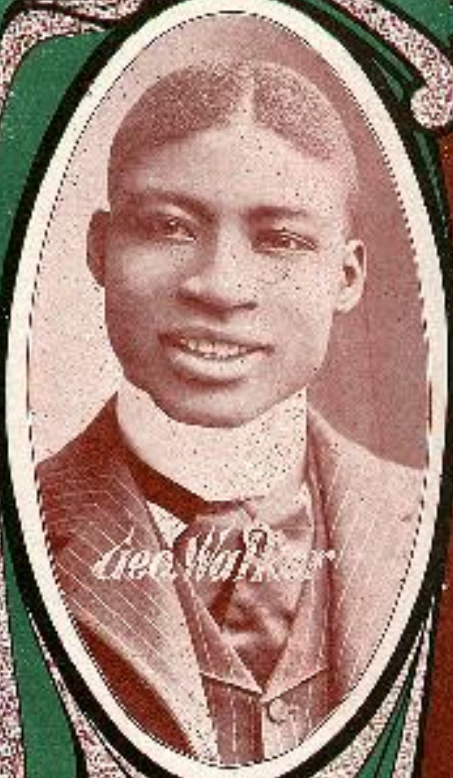
On Emancipation Day (March and Song)

Molly Green ❧ Society

Good Evenin' ❧ Vassar Girl

Cabbiseer's Entrance

Captain Kidd



HARRY VON TILZER
MUSIC PUBLISHING CO.
NEW YORK CITY